

「雪氷」72 巻の編集でお世話になったレフェリーの方々

朝岡 良浩	阿部 修	石坂 雅昭	伊豆田久雄	伊藤 譲
伊藤 陽一	遠藤八十一	河島 克久	熊倉 俊郎	白岩 孝行
高橋 修平	竹内由香里	対馬 勝年	中井 専人	八久保晶弘
原田鉦一郎	松元 高峰	的場 澄人	丸山 稔	山口 悟

(敬称略, あいうえお順)

編 集 後 記

出張の関係でこの編集後記を書いているのは 8 月中旬です。小・中学生のころは、この時期、夏休み前に立てた計画ではとくに終わっているはずの宿題の山と格闘していたものです。さて最近はどうかという、夏前に冬に取ったデータを眺めながら「今度の冬前までにこれはこの雑誌に投稿して、これはまとめてあの雑誌に投稿して」という妄想を抱きながら、結局はまた冬が始まるというある意味学生時代と変わらない生活をしています。

学生時代といえば、ある先生から「発表は時間が来れば終わるけれども、論文は書かなければ終わらない」といわれました。その時は、修論の発表前の緊張を和らげるために言ってくれたのだと思っていましたが「いくら発表を何回してもきちんと論文にしなければ何にもならない」ということを暗に伝えたかったのでは？と、現在山積みになって雪崩を起こしかけているデータを見ながら考えます。

データといえば、違う先生からは「データは腐る直前がおいしい」とも聞きました。しかしデジタル化と情報公開化が進むこのご時世「自分の取った観測データの賞味期限はどれくらいあるのだろう」、「そもそも自分の観測自体にどれくらいの意味があるのだろう」という疑問に常に悩まされる一方で「他人の取ったデータを

使って研究している人たちの何人が、実際の測定の現場に足を運んで状況を把握しているのだろう」とも思います。この夏公開された「踊る大捜査線」の青島刑事ではありませんが、「現象は PC の中で起こっているんじゃない!! 現場で起こっているんだ」と古いタイプの観測屋としては叫びたくなります。といっても、最近の傾向としてなかなか観測結果単独だけでは論文にはならないのも事実です。観測屋の使命(延命の手段)は、より多くの人にデータを有効活用してもらうために、出来るだけ早くデータ公開をする事かもしれません。その意味で、雪氷の研究ノートや速報というのはデータの発表の場としては非常に有効です。私も含めて観測屋の皆様、ぜひ手持ちのデータが腐って腐海の底に沈む前にどしどし投稿しましょう!!

さて、この編集後記が載るのは 11 月号。現在気象庁は、「今年の冬は寒くなる」と予想していますが、どうなることやら。「来年の夏は、早めにデータを解析して次の冬が来る前に論文を書くぞ」と、まるで学生時代の夏休みの最後の日のような反省をしながら、この編集後記を終わりにしたいと思います。

(防災科学技術研究所 雪氷防災研究センター
山口 悟)